

ザンビア初の 獣医学部の建設を支援

人気少女漫画『動物のお医者さん』を読んだことがあるだろうか。タイトル通り、動物のお医者さん。獣医師の活躍を描いた作品。その登場人物の一人に、アフリカ好きの先生が出てくる。アフリカへの赴任経験があり、研究室の中はアフリカンアートでいっぱい。そのモデルといわれるのが、北海道大学名誉教授の金川弘司先生と橋本信夫先生。JICAの支援により建設されたザンビア大学獣医学部のプロジェクトに携わった日本の獣医学界の権威だ。

アフリカ南部の内陸部にあるザンビア。隣国ジンバブエとの国境沿いには、世界三大瀑布の一つビクトリアの滝があり、そこからつながるザンベジ川沿いでは、ゾウやカバなどの野生動物にも出会える。

首都ルサカの中心部から車で20分、ザンビア大学のキャンパスの一番奥にある獣医学部。白い無機質な校舎が連なる中、ただ一つ、赤レンガづくりの建物は独特の色彩を放っている。校舎内はきれいに掃除されており、建設から30年近く経っているとは思えない。現在、ザンビア国内の獣医師のほとんどがこの大学の出身。しかし1980年代、国内にはザンビア人の獣医師が数人しかいなかった。

当時、国の一大産業の銅の生産に加え、農業や畜産業の拡大を図っていたザンビア。しかし畜産業に関しては、獣医師の不足

実習の一環として犬の手術に取り組む学生



フィールドでの実習も積極的に実施



足のため伝染病などへの対応が難しく、家畜の衛生状況の悪さが発展の足かせとなっていた。まさに必要とされていたのは、ザンビア人の獣医師。そこで日本はザンビア政府の要請を受けて、無償資金協力でザンビア大学内に獣医学部を作ること。そ

の青写真を描いたのが、北海道大学獣医学部の教授だった金川先生と橋本先生だ。「教授の中で一番の若手だったので、いきなりお前やってみろ」と任せられました。現地調査の後、研究室のレイアウトや資機材について、帰りの飛行機内であれやこれやと議論して報告書をまとめたのを覚えています」と金川先生は振り返る。

建物の建設は順調に進んでいた。しかし、国内に獣医師が不足しているということからは、学生を指導する人材がいらないということ。そこでJICAは85年から「ザンビア大学獣医学部技術協力計画プロジェクト」を開始。12年半にわたり、学生の指導、教員の能力強化、カリキュラム作成に取り組むことになった。



獣医学部の学生と日本人専門家。教員と生徒を超えた「きずな」が生まれていた



自然公園の国立公園を構成する麻酔銃を構える。野生動物の保護や感染症の監視も獣医師の重要な仕事

国の産業を支える 動物のお医者さん

南部アフリカの内陸国ザンビア。古くから銅の一大産地として知られるが、豊かな自然環境を生きかし、畜産業にも力を入れている。その礎となる動物たちを守るのがザンビア人の獣医師たち。JICAの支援により建設されたザンビア大学獣医学部の卒業生だ。

日本の教授陣から学んだ 実践力と勤勉さ

プロジェクト開始に伴い、まずJICAが取り組んだのは、北海道大学を含む全国16の獣医系の大学や獣医師会、地方自治体による「国内支援委員会」の設立だった。金川先生を筆頭に日本国内のバックアップ体制を万全にし、現地のニーズを的確に把握しながら、国内屈指の獣医師たちを送り込むことにしたのだ。

85年から86年にかけて、短期専門家として派遣された見上彪さん（当時・北海道大学教授）は「新しい学部で学べるということと、学生たちはとても意欲がありました。研究用の蒸留水などを調達するのに大変苦労しましたが、現地の素材で授業ができるように工夫を重ねました」と話す。日本人専門家から指導を受けた学生からは「実践的で分かりやすい授業」と評判だったという。

そして、JICAが最終的に目指していたのは獣医学部の「ザンビア化」。設立当初は日本人を含む外国人教員が大半を占めていたが、卒業生が着実に知識を身に付けて、指導する側になれるよう、もう一つの人づくりの場として日本の大学への留学制度を導入した。実際、日本で約15人が博士号を取得し、その多くがザンビア大学の教員となるべく帰国している。JICAのプロジェクトが終了した後、北海道大学との共同研究や人材交流を通じて、日本とつながり、続けているザンビア大学獣医学部。現在の学部長、ア



血液などを顕微鏡で調べる学生たち。実験機器も日本の協力で供与された

History

次世代への財産



2007年、ザンビア大学獣医学部内に設置された「北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター ザンビア拠点」。JICAと独立行政法人科学技術振興機構との連携の下、人間と動物の両方がかかる感染症の研究が進められている